

幼 兒 教 育

第二十卷
第六號

大正九年六月十五日發行

盲 兒 童 の 觀 察

東京盲學校長 町 田 則 文

○盲兒と幼稚園

現今幼稚園事業は、普通兒特に下層社會の兒童にもつとも必要である事はいふ迄もないのであるが、盲兒童にとつては、之が尙更必要となつて來た。然るに、我國における幼稚園教育の發達を考へて見ると、其發達の當時に於ては、多く上流社會の子供のみを收容して、幼稚園に子供を出すといふ事は、贅澤な事のやうに考へられて居つた。今でも、ある幼稚園ではかくの如き歴史的形跡がのこつて居るといはれないでもない。しかし將來に於ては、我國の幼稚園はますます、下層社會の兒童―家庭で放擲してあるものを收容し、もつて完全なる國民教育を施す準備とせねばならぬ。

したがつて、盲兒には一層幼稚園教育の必要があるので、ことに盲兒は各國ともに、時の古今をとはず貧民社會に多いのであつて、中流以上の社會には比較的少ないといふ事は明らかである。且亦、失明の原因より考ふるも、當歳より五六歳迄の間に失明するものが極めて多く、これ皆、家庭の取扱のわるい事に原因して居るのである。故に兒童を夙に幼稚園に入れて、充分な教育を施す時には、かゝる不幸をまねかずして、未然にふせぎ得る事が多い。當盲學校に於て既に調査したる失明期を見ても左の如くである。

在校生徒百八十四人中、

生れつきの失明者：…五十二人

(男、三十一名、女、二十一名)

一歳にして失明したるもの……二十五人

(男、二十名、女、五名)

二歳 同

……十三人

(男、十一名、女、二名)

三歳 同

……二十三人

(男、十八名、女、五名)

四歳 同

……十三人

(男、十二名、女、一名)

五歳 同

……八人

(男、六名、女、二名)

七歳 同

……五人

(男、一名、女、四名)

七歳以上は一人二人の失明者を存する位の割合で、その失明の時期は大部分かくのごとき有様となつて居る。これが皆家庭の取扱のわるいのに原因して居る。こは、ひとり我國のみならず、世界各國ともに同じ様な實例である。したがつて、貧民兒童の保護保育といふ事は各國ともに盛に唱へられ來りし所以である。故にこれらの盲兒をなるべくその幼少の折に、幼稚園——園といはずとも託兒所、幼稚科等その名稱の如何はこはないが——に入れてこれを保護

する事は實に焦眉の急である。我々盲人教育に携はる者として大いに世の幼稚園當事者にこの事を訴へたい。希くば、盲兒の保育についても、何時かは一度問題として、大いに研究して貰ひたいものである。必ずやこの必要の時期が到來する事を疑はない。もし世上の幼稚園にして、家庭から盲兒の入園を請求せられた時には、幼稚園教育者は、如何なる態度に出づるであらうか。盲目の故をもつて之を謝絶するか、或は入園せしめて保育するか、必ず二者その一を取らねばならぬわけである。

○盲人教育の歴史的考察

歐米諸文明國に於ても、盲人のために幼稚園を建てたといふのは、ごく最近のことで、初めは、小學校に於て學齡前の兒童を收容して盲人教育を幼稚園的に實行してをつた。したがつてフレイベル恩物を多少かへて用ひた位であつて、しかしこの當時は普通の兒童と一所であるから、教育上に種々の弊害を伴ひ、充分に盲兒に對する保育効果もあがらずに終つたのであつた。尤もひとり幼兒のみならず、大人ですら盲人は教育不可能なものど、近頃まで見做され

て居つたのである。それが盲人でも一般に學校教育が可能であると考えられ、随つて國民教育をほどこされるに到つたのは今から百二十年位前からのことで、それ以前には、不可能事として、閑却されてゐたのである。

盲人に學校教育を施す事を實行したのは、實に佛人ワランタン、アウイー氏である。當時は、かの佛蘭西革命の騒亂中であつたが、それにも拘らず、氏は盲學校をひらいて實に熱心に盲人教育に従事した。もつともこの當時同じ佛人で、レツペイといふ人が（アウイー氏の先輩ではあるが同時代の人である）聾啞教育を初めた。實にこの二種の特種教育は何れも佛人の手によつてなつたのである。

一體、佛國は、我國の維新當時にも指南役となつたのであるが、今次の大戦争に於ても、何となく佛國が歴史的に中心をなしてゐる様に思はれる。ヴェルサイユでこの大戦の講和會議がひらかれた事も今後歴史上に特記される一つであらう。ことに大革命前までは佛國は實に世界の中心になつて居つて英人にせよ、獨人にせよ、米人にせよ、日本にせよ勿論佛國に敬意をはらつてゐたと思はれるので、實にこの國が

各國文明の先達となつた様な觀がある。

聾啞教育も、盲人教育も、皆、佛人が其發企者たるのであつて、殊に佛國では、かのルイ九世（*ロウエーン*）の時代から盲人保護といふ事は實行されて居つた。三百人の盲人を收容する、所謂「三百盲人養育院」なるものを設立して、革命時代までは、即ち政府の保護といふわけで、歴史上重要な地位を占むるものとなつた。しかるに院内で盲人を如何に取扱つたかといへば盲人を、何代も何代も、實に、たゞで食はしてをくだけで、教育は勿論不可能として手もつけず、さりとて仕事をさせる事もなしに、ブラ／＼遊ばせて置いたのである。一體、人間といふものは無教育なものほど恐ろしいものはないので、實に亂暴狼藉、虎よりもおそろしい事を敢てするものであるが、是等盲人も、惡徳をつみ來つて、市内を徘徊し、「我こそは天子の代々の免許盲人である」とばかりに威張りちらし、盗みこそはせぬけれども、いたる所に強請して物を得んとし、實に巴里市中の美觀を害し、その亂暴は名狀すべからざるに到つた。ある時は、我が淺草公園の様な所に集合して「盲人音樂會」なりと稱し、彼等自作の聞くにたえざる歌をうたひ、樂譜を倒さ

にかざして、得意げに朗讀し、騒ぎまはるなど、實に不快きはまる、見るにたえざる事も度かさなつたのである。

アウイー氏はこの有様を見て、これを如何にもして教育せんものと思ひ、初めは前述の院内にある年少の盲人七八人を連れ來りて之に教育を施して見た。しかるに其效果著しきものがあつたので、これが動機となつて、氏をしてつひに盲學校設立の大業を敢行せしむるに到つたのである。

盲人の個人的教育と學校教育（一般教育）とはその發展の歴史を異にしてゐるのである。個人的の教育としては、現に近代、獨逸人でのワイゼンブルヒ氏、及ファン、バラジース女史の二盲人は個人的の教育をうけて有名な人となつてゐる。ことにバラジース女史は、音樂に妙を得て、演奏旅行をなし、巴里に於ては大好評を拍したのである。これらは個人としての教育ある盲人のよき證據となるのである。各國とも個人としては盲人で學者はいくらかも出てゐる。我國でもかの塙檢校のごときは好例である。個人としての盲人教育可能は何人も知つて居る事である。しかし學校教育として一般盲人に教育を施すとい

ふ事の問題は、アウイー氏をまつて初めて解決されたといへようと思ふ。即ち何れの盲人でも、どんな低能兒でも苟も人間たる以上は、國民教育を與へ得るといふ事を證明し實行したのは、アウイー氏その人であるといはねばならない。當時に於ては、學者は勿論一般の人は不可能なりとして何れも寧ろこの企に反對もし排斥もしたものである。

學校教育と個人教育とは區別して考へねばならぬ。

盲人に關する普通教育すら、上述の様な歴史的順序で發展して來て、日向淺き有様ゆゑ、その幼稚園教育といふ事が充分出來てゐないのは無理からぬ事である。ひとり盲人教育のみならず、普通の教育でも初めは個人教育、それより次第に團體的に一般教育となり、その一般教育も先づ小學校位の程度から初まつて行くのが自然の勢で、それから幼稚園教育にと發達して行く様である。現に我國でも明治維新前は、寺小屋式の個人教育であつた。しかも偉人はなか／＼出たが、當時は國民教育は皆無であつた。國民教育の初まつたのは、實に明治五年、學制發布以來

であつて、したがつて、幼稚園教育などは、尙更新しいものである。今日でも普通教育の問題がなかくよく研究もされ、解決もされて行くけれども、幼稚園教育の問題となると、どうも躊躇せざるを得ぬ有様で、折々、幼稚園保育者大會で決議した事項をもつて見るも、その有様がうかゞはれるやうにおもふ。

初めて、外國で、盲幼兒の保育を實行したのは北米合衆國のマサチューセツ州立盲學校——一名パーキンス盲學校——である。(ポストンより一時間の汽車里程の所にある一大盲學校でその設立に凡そ二百萬弗を費したと云はれてゐる)此處の前校長なる、アナグノス氏(ギリシヤ人)が、かのジャマイカの平原に初めて幼稚園を設けた。全く男兒と女兒とを別にして、教師は男兒部に十人、女兒部に四人で他に、音樂の専任教師と醫師とがあり、全體は八組に別られた。氏の研究の結果、實に、盲兒にても國民教育を授け得る年齢以前にその準備教育を授くる事の可能なのが明らかにせられたのである。こは世人の熟知の事であらうと思ふが、かの「我が生涯」をあらはした盲、聾、啞者(ヘレンケラー)女史(今は四十歳位であらう)も、亦、既に數十年まへに故人となつたこれも盲聾啞

者なるロウラ・デ・ブリッヂマン女史何れもこのアナグノス氏の教育をうけたのである。

○盲兒ごその保育法

盲兒保育の仕方は、大體、恩物などによるのであるが、自然界に接觸せしむるといふ事が一番大切な事となつてゐる。さて盲兒の家庭に於ける取扱はれ方が二つにわかれる。一つはあまり家庭で愛する餘りに、ことに母親が保護しすぎて、何から何まで世話をし、食物も口に入れてやるし、歩かせるのはあぶないと、負ふてしまふ、少しも自ら活動させないので、そのために兒童の筋肉は發達せず、手足ははたらかず、盲目に加ふるに身體の不完全をもつてするといふ様な有様となつてしまふ。これを防ぐには、自ら歩かせもし、遊ばせもし、いろ／＼活動させる事の大切な事はいふ迄もない。今一つは、前とは反對に家庭が全く放任してかまはない事である、一體に貧民社會に多いので、教育どころでなくほとんど手の下しようなない程に何もしらない。これもかくならぬやうに早くから幼稚園で收容すればふせぐ事が出来るわけである。

殊に人類は、五六歳の頃が、一番自然と親しみたい欲望の盛な時で、五官の働きも、きはめて活潑な時期である。この期を捉へて之を利用せねばならぬ。現に我が校でも小さな子供に手工を課して居るが、その喜びは非常なもので、粘土細工にしても、紙細工にしても、熱心と興味とをもつてやつて居る。この喜びを、教育者が捉へては他日の發展に資すべきである。此處に面白い話がある、外國の話ではあるが、ある職工夫婦が一盲兒を持つてゐた。二人とも稼ぎに出るので朝から夕方まで留守である。そこでその盲兒のために晝の食事をそなへ、あたりを整頓して危険のない様にして、戸に鍵をかけて出て行つた、その出る際にいつでも「よくおとなしく留守をしてお出で。室の中のものに觸つたり、こはしてはいけない。おとなしくしてゐれば、きつと明日はいゝものを買つてあげる」といひきかせた。終日働いて歸つて來て見ると子供はちやんとねてゐる。室の内の一物も損してもゐない、觸れたあともない、そこで両親は得々として満足して居つた。何ぞしらんその兒は全く活動する事をしなかつた。一日寢てゐた、食事も床の中でする、歩くのは面倒で、用があれば匍ひま

はつてします。手も足も働かせようともしない、そうしてゐれば両親からほめられてゐたのである。勿論これはその職工なる両親は教育的知識がないために、その盲兒自身の活動の尊さといふものを夢にも考へてゐなかつたのであらうが、随分可笑な話である。しかしこれに似た取りあつかひを世間でよくして居る事はあるまいか。頭から叱りつけて、たゞ大人しくせよと命じて、子供としての——たとひ盲兒にせよ年齢相當の自己活動は實に豊富であるのに——生活をさせる事なしにおしつけてしまふ。これでは小學校期になつて何か教へようとする時に成績がわるいといふ事も無理からぬ事で、盲人だから頭がわるいといふよりも、小學校期になる迄にのぼしてをくべき力をおさへてをいたからいけないといふ事になる。

かゝる弊害に陥らぬようにするためには、どうしても幼稚園に集めて教育するより他に道はないのである。家庭で——ここにその多くが貧民階級にあるとすれば——等閑に附せられてゐるまゝにしてをいでは、將來、決してよくなる見込はないのである。どうしても、幼稚園教育を授けねばならない。普通の

健全の兒童を取扱つてゐる幼稚園の教育精神もこれと同じであると思ふ。いたづらに形式にながれて、幼兒の性質にあはぬ事をたえず強いるようでは、到底その教育効果をあげ得るものではない。幼兒は實に手を、足を、五官を充分にはたらかせて思ふまゝに自然のあらゆるものを彼等の感官のゆるすだけに獲得せしむるようさせねばならない。

○盲兒童の身體的特長

盲兒は盲目なるために、すべて心身に悪影響をうけて居るのは勿論であるが先づその身體的方面をいへば、顔貌の醜惡なること、その顔貌の表情及外見の表情(手つき動作など)に快濶の要素を缺く事が著しい。その他、自由運動といふ事が出来なくて、その運動もまことに狭い空間にかぎられてゐる。猥りに他人の手引を依頼する考へをおこす事が多い。この手引といふ事は、初めは仕方がないとしても、少し馴れたらば之は絶對に與へぬといふ様にせねばならぬ。連れてあるく事が習慣になれば、その氣になつてしまつて、何時になつても一人で歩くといふ事が出来ない。何處迄も教育と教授とを刻々に施して、

上述の缺陷を、全くのぞくように、また全くとまでは行かずとも、せめて、輕減するように力を致さねばならぬ。

ここに、手引といふ事は、初めは多少與ふことも、可成的に早く之をやめて、獨立して歩ましめねばならぬ。自分の身體を自分で自由につかつて、起居、進退の出来ないといふ、これほど不獨立な事はないのである。これは盲兒のみならず、普通兒でもさうである。如何に名門富豪の子弟といへども、自分の身體の動作は獨立でなければならぬ。しかるに、學校の往復に自動車や人力車を用うるとき、或は女中の背に、書生の背におぶさつて來る如き、實に子供の自然の發達をさまざまるものである。もつとも、考へない下僕書生などは、足ののろい子供をよちよちあるかせるよりも、荷物のかはりに背負うてしまふ方がどれ位簡單でよいかもしれないので、彼等は、幼兒が如何に驚異の眼をひらいて道々の刺戟を一つ一つとらへ、よちよちと氣ながにあるいてゐる、その刻々にこそ、眞の教育價値があるなどは、夢にも思つてゐない。たゞ女中は早く自分の身が樂になり、よい、書生は一頁でも多く本がよみたいといふ譯で、

さつさと、荷物扱にしてしまふのである。それ雨が降る、今日は風が吹く、何とか理屈をつけて、親達もまたその理屈をよいことにして乗物にのせて子供を送り出す。これは實に子供の活動の尊さを無視した、むしろ無知な非教育的な取扱といはねばならぬ。人間といふものは雨の日は雨の仕度で氣をつけてあるき、お天氣の日には大手を振つてあるく、風の日には風をよける工夫をしてあるくといふ様に、自然の變化に出會つてそのさくべからざる周圍のために必要な練習をするといふ事が實に大切な事で、これが最も自然な教育である。子供は雨が降つたとて決して厭だとは思はない、寧ろ水溜の中をピチャ／＼あるきたがる。かはいらしい傘をさして一人で雨の中をあるくのをどんなによろこぶかしれぬ、雨でこまるといふのは無性者になつた、生活につかれた大人の言草である。最も自然になさるべきよい機會をつかはずに、自動車よ、人力車よといつて子供を荷物がはりに運んでしまつては、まるでこの方面の教育は出来なくなつてしまふ。先生がいくら子供にむかつて「雨の日にあるくのはえらい」といつて奨励しても、家庭が、また附添が、これを理解しないで、歩きたく

てたまらぬ子供を、さつさと荷物にしてしまふ様では、先生のいふことも何にもならないわけである。少し話はそれだが、盲兒をして獨立に歩かしめるといふ事は實に大切な事である事をくりかへして言ひたい。

ことに、盲人が運動をする時は、躊躇と臆病とがいつも伴つてゐる。歩行の際には、兩手を前方にひろげ出し、足を引摺りながら、物に衝突するを避けんとして潜行するを常とし、殊に中途失明のものは尙更この潜行の習慣が多い。先天性の盲人ならば、家庭内にある時に、馬鹿氣た丁寧取扱はれさへしなければ、大概は五六歳以上になれば歩く習慣もついでゐるので、歩行も大膽に出来る。ことに幼稚園なり學校なりに入つた際には、このことについては、ことに緻密な計畫にもとづいた教案によつて教育せねばならない。年齢の長じた盲人が、常に、一定の場所に苦痛をしのびながら坐して居るものが多いのは幼年時代から運動を奨励されることのなかつたために、筋肉が働かなくなつてしまつたのである。したがつて、その永き塾居の結果、新鮮なる空氣の呼吸

が妨げられ、又往々消化不良をおこし、これらに關聯して、種々の皮膚病やら潰瘍病の様なものが発生して來、是等が慢性となつて醫治を必要とするに至るのである。

盲人の容貌が蒼白で、疾病的の外貌を呈してゐるのは、身體に受くべき空氣及光線の作用の不充分の然らしむるものである。筋肉、ことに、脚部の筋肉と、軀幹に屬する筋肉は練習が乏しきために、軟弱となつてゐるので、盲人の多數は、僅かの散歩を試みても、忽ち、疲勞を來すのであつて、したがつてこれがますます、運動を嫌ふ原因となるものである。

筋肉の活動する事が少ないために、一層多量の溫暖を要求する。これは普通健全な女子に於ても往々目撃する所であるが、老齡の盲婦人にしてつねに室内に引籠り勝ちのものは、度外に暖められた室内、又は澤山の暖衣と、あつい毛入の蒲團などを要求し、尙寒がつて居るといふのも、全く筋肉の活動をさせぬためであらう。

○盲人の起居動作

盲人の起居動作は、概して醜惡であると言ひたい。

何となく角ばつてゐて、不手際な事が多い。身體のまげかたなど徒らに強^{こは}きに失し、又、他人と談話する際には、手であたりのものを撫^なでまはしてゐたり、著坐するといつても、馬鹿にかたくなつたり、不安定な恰好をしたりして、その姿勢よろしきを得ず、ことに食事などの時には、練習のない盲人などになると、箸や茶碗のもち方、食物の取り方などがなか／＼困難で、内容をしらべるために食品の中に指を入れたり、指頭で食物を口内に運んだり、實に同坐のものが食慾をなくしてしまふ程の不體裁を演ずる事がある。

畢竟するに善良なる教育とは、かゝる不體裁をなからしめて、たとへ盲なりといへども普通人と同様に起居動作が出来る様にする事を目的とすべきである。しかるに、氣の毒な事には、世の教育ある父母にして、これに氣がつかず、かゝる外形的でしかもきはめて重要な方面に注意をほらはずに、その不幸なる盲兒を育てゝゐるものが多い、大いに反省を促したいのである。

盲人には、この外に、しば／＼醜^{みにく}き、不體裁なる動

作がある。即ち眼窩に指を入れる、蓋し、これによつて日光の快樂を受けんとするためであらう。又、たえず頭を振るとか、上體を動揺するとか、手足をバタ／＼させるとかする。かゝる不體裁な動作を、時には一時間の永きに互つてつゞけてゐる事がある。普通人の見て不快にたえぬ思ひをさせるのである。

又、盲目は、不潔を誘致する原因で、濫りにいろいろの物品に觸れる。塵埃でも汚物でもおかまひなしである。これは普通人の様に、眼といふ警戒者がないためで何にでも觸れる。實に自己の身體ならびに環境における清潔と不潔とに對する眼の監督が常に缺くるためで、氣の毒なところである。

○盲目の取扱ひを如何にす

べきか

以上の様な不體裁なる習癖を取除くためには、盲兒をして、自分の事を自らさせる様にせねばならぬ。もし、他人から一々の世話をしてやれば、一向盲兒のためにはならない。即ち、盲兒の幼稚園教育、學校教育は、大部分この方面の教育に力をそゝがねばな

らない。而して、これらの習癖は、幼年時代に取除かなければ、つひには習ひ性となつて到底取りのぞく事の出来ないものとなる。世の盲人を見ると、どうも、歩行といひ、談話の體裁といひ、服装の關係といひ、何とはなしに健康人と異つて居るのは、畢竟するに、上述の教育が缺乏して居ることによるのである。

普通の兒童は、よし、教育を興へられずともその有するつよき模倣性によつて、自然に周圍を見做つて教育される様になるけれども、盲兒に於ては眼から來る教育は皆無である。故に一つ一つ何から何まで教育せねばならない。これが實に、盲兒に對して幼稚園教育が必樞である所以である。(談話：未校閱・文責在記者)

○心理研究懸賞論文の募集

帝大の心理學研究會では、心理學上の獨創的研究を促すために、毎年一回づつ研究論文を募集する由で、第一回は賞金を五百圓とし、三種の問題を提供して一般の應募をまつこのことである。詳細の規定は「心理研究」の六月號に發表された。